つた。空には一點の雲もなく、琵琶湖と遠山が特有と思はれる、淡い淺黃の水蒸氣が和かにされて、靜に明に見えるのであつた。郊外にはクロバーに似た明るい紅い花で一面に覆はれて居る。あの草は秣には用ゐない。尤も用える家畜を飼はないので。しかしこの燃ゆるやうな美しい色彩は、思ふたよりも躑躅か見附からないに反してこれに慰藉を得た。已れはこゝに寫生を初めて、研究して居る間に、ボーイの松葉をこの近傍に躑躅を探させに遣ッた、松葉は敏捷な男で見樣見眞似でわれの呼吸を呑込んで居るのである。

松葉は午後早く歸つて來た、躑躅はなかつたが、町の方に競馬があるといふので、それを見物に出掛けた。見物の場所は競馬の發足點であッた。競馬の場所は二百五十ヤードの河原で、仕組は總て西洋風とは相違して居る馬の發足に太鼓を用ゐた。それから裸馬に曲乘りなどをした。見て居る間はラクラクテイの家婢のオカツサンが來て茶や菓子等を出してくれて附添つて居てくれた、松葉のいふには、競馬は後には賭事で喧嘩があると聞いて、早く歸ッた。日本に居る間に喧嘩といふ事を聞いたのはこれが初であつたので、見たいとも思ふた。二日の强雨で道路が再び川の如くになッた。それか數日過ッて日本人の曲馬があッた。これも西洋のとは全く異ッて、馬上で日本の芝居をするやうなものであッた。

此頃の天氣の日は全然壯麗なもので、暑さも暑いが、春の清新な氣が猶存して居る。時々雨降りや曇天がちよい〳〵と這入ッて來る。が、庭園に接近した處に居ッたので、空に時間を費すやうな事もせなかッた。蓮の葉も池に出初める、燕子花は渚に咲出す、躑躅は花を以て覆ひ、薄綠の楓の枝は紅い木芽を吹初めた。時には降注ぐ雨がわが寫生傘に滴下るので、屋内に降込められた。オカツサンといふ鳶色の大鷲絨のやうな眼を持ッた、こびんぢよや其他の家婢共が、飽かずわれの所持品を見たり、スケツチ帖を繰明けたり、幾度となく質問をする。時には癪に觸はることもあるが、可笑しくもあッた。こんな事が西洋人に對する同情の結果でなくて、また文明人といふやうな考でなく、たゝ異ッた動物だといふ待遇を受けると思ふと、甚だ嫌惡な氣もする。

夏の朝の森

山紫水明の境は吾人をして仙寰の思ひあらしめる。山を遙かに望みたる田舍も又吾人に愉快と興味とを與ふるものである。殊に野花の亂開せる野原と、綠滴る夏の朝の森ほど吾等に快適するものはない。種々なる色彩の變化極まりなき野花に烏羽の蝶のとびくるふさま、綠深き森陰には白き百合の微笑みて、花には露の珠を宿し、夜べには星の光もうつしたらんその輝き、綠の鈴かと思ふ森の胡桃、どろ木の小さき葉は風につれて面白く動き、これ等の凡ては吾等の目を悅ばし新しき空氣は吾等の健康を益し、流るゝ水音と小鳥の聲とは吾等の耳に美しき音樂と響くのである、（丸山晩霞氏、女性と趣味）